

万葉集と万葉の時代 in 名張

万葉集 構成 編集者 大伴家持

全部の歌数 4516 番が最終 巻数 20 巻で構成 表現文字 漢字で表現 (万葉仮名)

各巻の歌の部類 3つのジャンル

- ①「雑歌 (ぞうか)」宴や旅行での歌。
- ②「相聞歌 (そうもんか)」男女の恋の歌。
- ③「挽歌 (ばんか)」人の死に関する歌。

歌体は、短歌・長歌・旋頭歌の三種

新元号「令和」は序文から 注目を集めた。 梅の花の歌 32 首 第五巻

初春の令月にして、 気淑 (よ) く風和 (やはら) ぎ

万葉仮名の文字の統一について

名張の名前 隠 名壑 那婆理 名張 も 「なばり」

万葉集 1 巻 43

わが背子はいづく行くらむ沖つ藻の隠の山を今日か越ゆらむ

当麻真人麻呂 (たぎまのまひとまる) の妻が作った歌

万葉集 4 巻 511

わが背子はいづく行くらむ沖つ藻の隠の山を今日か越ゆらむ

當麻麻呂大夫妻 (たぎまのまろまえつきみのつま)

當麻麻呂が伊勢の国に行っている時妻が作る歌

万葉集 1 巻 60

宵に逢ひて朝面無み隠にか 日長く妹が廬りせりけむ

長皇子御歌 天武天皇の第四子

万葉集 8 巻 1563

宵に逢ひて朝面なみ隠野の 萩は散りにき黄葉早継げ

縁達帥の歌 不明 僧侶か百濟からの渡来人か

大伯皇女 と 弟 大津皇子 の歌

大津皇子

万葉集 3 巻 416 ももつたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

懷風藻 臨終 終(おわり)に臨(のぞ)みて
金烏臨西舎 金烏(きんう) 西舎(せいしゃ)に臨(のぞ)み
鼓聲催短命 鼓聲(こせい) 短命(たんめい)を催(もよ)おす
泉路無寶主 泉路(せんろ) 寶主(ひんしゅ)無(な)し
此夕誰家向 此の夕(ゆうべ) 誰(た)が家にか向(むか)わん

大来(伯)皇女の歌 万葉集2巻

- 105 わが背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露に我が立ち濡れし
106 二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ
163 神風の伊勢の国にもあらましをなにしか来けむ君もあらなくに ポイントの歌
164 見まく欲り我がする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに
165 うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む
166 磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに

当時の宗教・暦を当時の人の目線で万葉集を読む

宗教＝神道・仏教・道教

天武天皇の御製の歌 万葉集25番

み吉野の耳我(みみが)の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間(ま)なくそ 雨は
降りける その雪の 時なきがごと その雨の 間なきがごとく 隈(くま)もおち
ず 思ひつつぞ来(こ)し その山道を

万葉集26番は同様の歌だが続けてのせる。ほぼ重複

壬申の乱での名張での特筆事項

「横河にいたらむとするに黒雲有り、広さ十余丈にして天に経(ワタ)れり。時に天皇
異(あやし)びたまふ。則ち燭を擧(ささ)げて親ら式を乗(と)りて占ひて日はく」

占ひと式盤

万葉集27

天武天皇が吉野離宮に行幸されたときの歌

よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見

天武8年5月5日吉野宮に幸す 吉野盟約 この日を選んだ理由

万葉集28 持統天皇 持統11年8月1日が文武天皇に譲位の日歌った。

春過ぎて夏来たるらし白妙の衣ほしたり天の香具山

一般的解釈と別解釈

具注暦は持統天皇の時代に使っていた。 発掘された具注暦

暦と時刻と方位と干支の対応の図 五行思想 木 火 土 金 水

もう一度 大来皇女の歌をみよう

163 番 神風の伊勢の国にもあらましをなにしか来けむ君もあらなくに

この歌の前に長歌 162 番の歌があり、163 はその反歌とする。

162 番 天武天皇崩之後八年九月九日、奉為御齊會之夜夢裏習賜御譔一首

明日香の浄御原の宮に天の下知らしめししやすみししわご大君高照らす日の御子

いかさまに思ほしめせか神風の伊勢の国は沖つ藻も靡ける波に潮気のみ

香れる国にうまこりあやにともしき 高照らす 日の御子

この歌の反歌として 164、165、166、がある。

道教思想 経典『抱朴子』による（ほうぼくし）

生前善徳を積んだ者は、死後紫宮南方の朱宮で特訓を受け、神仙となって、東方の東海青童君の治める東華宮に遊ぶ。

正殿の南に宮殿（殯宮）朱宮 埋葬を南にし、南で訓練を受け、神仙東に復活する。

天武天皇の御陵は藤原京から真南にある。

持統6年（692）3月の持統天皇の伊勢行幸

持統天皇の伊勢行幸について

藤原京は持統天皇4年（690年）に着工 無事できるために、地鎮祭を必要とした。

その前に伊勢の天照大神に「奉幣」する必要と思った。

2月11日に詔 3月3日に伊勢行幸を実施する。

大三輪朝臣高市麻呂が、この時期農耕の妨げ。伊勢行幸を取りやめを申し出る。

6年3月3日 大三輪朝臣高市麻呂の反対を押し切って伊勢に行く表明。

具注歴によると「農作の節」に当たらない。農作業に重要な「穀雨」（3月28日）余裕をもって3月20日に帰着。

持統6年5月23日藤原京を鎮め祭らむ。

持統天皇の孫の軽（後の文武天皇）に持統の作戦と柿本人麻呂の対応

作戦 1、父親の存在を特別な存在にした。

柿本人麻呂は、軽皇子が安騎の野に宿る時、柿本人麻呂の歌 万葉集 45

やすみししわが大君高照らす日の皇子神ながら神さびせすと太敷かす京を置いてこ
もりくの泊瀬（はつせ）の山は真木立つ荒き山道（やまじ）を岩が根禁樹（さえぎ）
押しなべ坂鳥朝越えまして玉かぎる夕さり来ればみ雪降る安騎の大野にはたすすき
小竹（しの）を押しなべ草枕旅宿りせず古（いにしえ）思ひて

万葉集 46 安騎の野に宿る旅人うちなびきいも寝（ぬ）らめやも古思ふに

万葉集 47 ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し

そして、軽皇子に

万葉集 48 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

万葉集 49 日並（ひなみし）の皇子の尊の馬並めてみ狩り立たしし時は来（き）向かふ

作戦 2、漢詩が詠えない天皇の中、幼少から養育させた。

軽皇子が他の皇子より卓越させる必要があった。

経験差を補う英才教育を幼少期から実施した。

軽皇子の英才教育の根拠。

『懐風藻』36に「従駕応詔」 駕（かご）に従い、詔に応じる

皇太子学士従五位下伊予部馬養

馬養は703年の功賞（息子）。皇太子学士は軽皇子 中心は不比等。

作戦どおり軽皇子を天皇に出来た 文武天皇の誕生

文武天皇としての漢詩が3首が懐風藻にある

懐風藻 15 25歳

月を詠ず

月舟移霧渚

月舟（げっしゅう）

霧渚（むしょう）に移り

楓楫泛霞濱

楓楫（ふうしゅう）

霞濱（かひん）に泛（うか）ぶ

臺上澄流耀

臺上（だいじょう）

澄み流る耀（ひか）り

酒中沈去輪

酒中 沈み去る輪

水下斜陰碎

水下りて斜陰碎け

樹落秋光新

樹落ちて秋光新た

獨以星間鏡

獨り星間の鏡を以ちて

還浮雲漢津

還た雲漢の津（しん）に浮かぶ

月が酒盃に写り 盃を傾けると 月輪が沈み去る 月を飲み干す

吉野行幸 持統天皇が最も多い これだけ吉野に行った理由

持統天皇の時は吉野行幸が異常なほど多い天皇をやめると 1 回だけ。

万葉集 3245 作者未詳

天橋も長くもがも高山も高くもがも月夜見の持てるをち水い取り来て君に奉りてを
ち得てしかも

越水⇒変若水（おちみず、をちみづ）とは、飲めば若返るといわれた水。月の不死信
仰に関わる霊薬の一つ。

万葉集 627 作者：おとめ,佐伯宿禰赤麻呂に答えて贈る歌

我がたもと まかむと思はむ ますらをは 変若水求め 白髪生ひにけり

万葉集 628 作者：佐伯宿禰赤麻呂の答える歌

白髪生ふる ことは思はず 変若水は かにもかくにも 求めて行かむ

月夜見の持てるをち水 万葉集 3245 番

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月読の 持てる変若水 い取り来て
君に奉りて 変若しめむはも

月に変若水がある。その月が見える時に 吉野の清い水を盃に入れ 月を盃に写し
変若水を飲む この行為は、晴れて月が見える時でないは無理

この事により若さを保つ 若返る行為が 天皇として必要

吉野に出向く必要がここにあった

持統天皇吉野行幸 ○ 満月 16 ◎ 満月近 4

年	月	日	帰着	月令	月	日	帰着	月令	月	日	帰着	月令	月	日	帰着	月令	月	日	帰着	月令
3	1	18	21	◎	8	4	無													
4	2	17	25	○	5	3	10		8	4	11		10	5	10		12	12	14	○
5	1	16	23	○	4	16	22	○	7	3	12	◎	10	13	20	○				
6	5	12	16	○	7	9	28	○	10	12	19	○								
7	3	6	13	○	5	1	7		7	7	16	○	8	17	21		11	5	10	
8	1	24	無		4	7	14	○	9	4	無									
9	2	8	15	○	3	12	15	○	6	18	26	◎	8	24	30		12	5	13	○
10	2	3	13	○	4	28	5.4		6	18	26	◎								
11	4	7	14	○																

吉野行幸 3 1 回、内満月 16 回、満月近し 4 回合計 2 0 回は満月に近い、不明は 3 回
毎年満月・満月に近い

万葉集 43 番 511 番

わが背子はいづく行くらむ沖つ藻の隠の山を今日か越ゆらむ

前の歌の確認

万葉集 36 番 「吉野での大宮人の様子」

やすみししわが大君の 聞こしをす天の下に 国はしもさはにあれども山川の清き
河内(こうち)と御心を吉野の国の花散らふ秋津の野辺に宮柱太敷きませば ももし
きの大宮人は 舟並めて朝川渡り 舟競(きお)ひ夕川渡るこの川の 絶ゆる事なく
この山のいや高知らす みなそそく滝のみやこは 見れど飽かぬかも

万葉集 37 反歌

見れど飽かぬ吉野の川の常滑(とこなめ)の絶ゆる事なくまたかへり見む

万葉集 38 番

やすみしし我が大君 神ながら神さびせすと 吉野川 たぎつ河内に高殿を高知り
まして登り立ち国見をせせば たたなはる青垣山 やまつみの奉る御調と 春へに
は花かざし持ち 秋立てば黄葉かざせり 行き沿ふ川の神も 大御食に仕へ奉ると
上つ瀬に鵜川を立ち 下つ瀬に小網さし渡す 山川も依りて仕ふる 神の御代かも

「吉野での天皇の様子」

反歌 万葉集 39 番 山川も依りて仕ふる神ながら たぎつ河内に舟出せずかも

持統天皇の伊勢行幸のとき、都に留まった柿本人麻呂が作った歌

万葉集 40 番 あみの浦に舟乗りすらむ娘子らが 玉裳の裾に潮満つらむか

万葉集 41 番 釧つくたふしの崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ答志島

万葉集 42 番 潮さみに伊良虞の島辺漕ぐ舟に妹乗るらむか荒き島廻を

次にあるのが 我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

万葉集 511 の前にある 509 番 丹比真人笠麻呂が筑紫の国に下った赴任の様子之歌

筑紫の国に赴く自分の気持ち景色の移り変わり、どうして妻に話さず出てきたのか。

反歌 万葉集 510

丹比真人笠麻呂が筑紫の国に下った後に出る歌 509・510

万葉集 43 の前は、留守役の柿本人丸の歌で後筑紫の国に下る時に、万葉集 303

伊勢行幸に反対した、大神高市麻呂も後筑紫の国に下る。

同じ運命をどう感じるか。編集者の意図がある。

終わり